

もう一つのファミリーヒストリー

園長 児嶋 草次郎

残暑お見舞い申し上げます。

猛暑が続いている中で、庭のカンナやサルスベリが、鮮やかに元気よく花を咲かせ、その周辺では雑草がすごい勢いで成長し続けています。木々もたくましく枝葉を広げて、私たちに木陰を作ってくれています。

田舎はこんなに平和であるのに、大都会の方は、コロナ感染症第5波で、大変なことになりつつあるようです。インドで変異株（デルタ株）が発生し、それがまたたく間にまた世界に広がっているのです。今朝（8月6日）の新聞では、東京で新規感染者が5000人を突破したと書いてありました。全国では15000人を超えたそうです。宮崎はまだ30人台です。

世界を見ると、感染者は2億人を超え、そのうちアメリカ3500万人、インド3100万人、ブラジル2000万人などと書いてありました。当然亡くなる人も多いわけで、世界全体で425万人ほどの人々が命を落としているようです。

平和の祭典東京オリンピックの頃には一通りワクチン接種も終わり、のんびりテレビ観戦もできると予想していたのに、甘くはありませんでした。

さて、今回は、岡山孤児院の歴史は、まだ終わってないと実感させられる出来事があり、それについて書かせていただきます。人間の尊厳、家族の絆は時を超えということを認識させられる感動的なお話です。プライバシー保護のため、真実を曲げない程度に言葉を変えている部分もあります。

児嶋虜一郎・登美記念式に御出席くださいまして、ありがとうございます。今日は、石井記念友愛社の創立の意味を再確認し、現在この石井記念友愛社に関係する者として、それぞれの立場でその役割・使命について考える日であります。友愛園の子供たちにとっても、なぜ自分はここで生活しているのか、これから社会に自立していく上において、何をここで身につけておかねばならないのかを、立ち止まって考える一日としなければなりません。

ところで、7月1日に一通の手紙が届きました。熊本市内に住んでおられる79歳のおじいさん（仮名 長嶋太郎様）からです。何と書いてあったかと言いますと、自分の父は、自分が14歳の時に56歳で病死した。母は土方などをしながら、極貧の中で、兄弟6人を育ててくれた。そして人並みに社会人になることができた。時がたち、母も亡くなり兄妹6人のうち4人も亡くなり、自分も79歳となった。ここからが重要です。

父が石井十次先生にお世話になったということは聞いていたが、それ以外のことは、何も分かっていない。教えてほしい。そのような内容でした。自分も晩年を迎え、子や孫たちに父のことをキチンと伝えたい、そういう強い思いをお持ちのようでした。

さっそく石井十次資料館で調べました。以下は分かったことです。仮の名前を長嶋次郎さんとします。次郎さんは、明治39年5月に捨て子として岡山孤児院で保護されています。今から115年

前の話です。生年月日は明治 33 年（1900 年）1 月 1 日となっていますが、これは石井十次先生が決めた可能性が強い。捨て子というのは、着の身着のまま親から置き去りにされるわけですから、その子供が小さかったら、家族のことやら年令やら全然分かりません。5、6 才くらいの少年であったと思われまゝ。5、6 才くらいだったら、家が近くだったら自分で歩いて帰れるので、どこか遠くから連れて来られたのかもしれませんが。戸籍も分かりませんので、新たに戸籍も作らなければなりませんでした。

明治 39 年 5 月というと、もうすでに岡山孤児院の子供の数は、1200 人ほどに増えています。その前の年、東北地方の大冷害で多くの農家が破産し、家族崩壊して行き場のない子供たちが 800 人以上続々と入所して、施設内は大変混乱していました。

子供たちはよく聞いてほしいのですが、明治時代は、国にも経済的に余裕はなく、このような施設に対し、ほとんど支援をしませんでした。ですから、石井十次先生は、必死で日本全国各地で寄付金集めをして、子供たちを養いました。寄付金が集まらなければ、食べ物が買えませんので飢え死にするしかありません。その当時、石井十次先生は、1000 人以上の子供たちを家庭的に生活させるため、今友愛園に建てているような小さな家を次々に建て、保母さん 1 人に 12、3 人くらいの子供たちを単位とする生活をさせました。こうするにも莫大なお金を必要とします。寄付金というのは、みんなも赤い羽根募金などに協力したことがあるかもしれませんが、相手に対する期待と信頼がなければだれも出しません。ドブに捨てるようなことになるとしたら、いくら頼まれても出しません。実は昨日は宮崎の香月さんという方から 150 万円の御寄付をいただきました。今までも何度かいただいています。100 万円は大学進学者の奨学金基金にするため、50 万円は今大学で学んでいる学生のためです。

石井十次先生も必死で寄付金集めをしましたが、当時の子供たちも、世間の人たちの期待・信頼に答えるため、一所懸命勉強し、また、岡山孤児院内で自立訓練するために働きました。寄付というのは、友愛社に対する信頼・期待があって初めてあり得ることです。現在石井十次資料館には、1200 名の子供たちが一緒に写った写真がありますが、あの中の一人が先ほどの長嶋次郎さんです。

一人一人が志を持って、将来の夢を実現するためにがんばったのです。生活は今より 2 倍も 3 倍も厳しかったと思います。孤児であったり捨て子であったりするわけですから、自立してもだれも頼れません。自分で生活力と自律力と働く力を岡山孤児院内にいるうちに身につけておかねばなりません。今友愛園で、掃除をさぼったり色々ごまかしたり、事件を起こしたりする者もいますが、岡山孤児院では考えられないことです。恥ずかしいことです。

その後長嶋次郎さんは、岡山孤児院内の学校を卒業すると、この宮崎茶臼原に他の子供たちと一緒に移住します。石井十次先生は、この茶臼原に一つの理想郷を作ろうとしたのです。この茶臼原を子供たちと一緒に開拓し、やがて、一人一人農家として独立させ、ゆくゆくは、新しく出た孤児や捨て子たちは、その農家にあずけようと思ったのです。言わば里親村を作ろうと考えました。みんなで共助・共生し合える地域社会づくりです。

次郎さんも、茶臼原の開拓に奮闘努力しました。しかし、20 歳の時、大正 9 年です。徴兵検査を受けることを命じる手紙が来て、岡山孤児院を退院しています。当時は、20 歳になったら、徴兵検査を受けなければなりませんでした。軍団主義時代で、徴兵制があり、男子は成人したら兵役に就く義務があったのです。おそらく次郎さんは、軍隊に入隊したのではないかと思います。大正 9 年と言えば 1920 年、今から 101 年前です。

問い合わせた来られた息子さんの手紙によると、昭和 17 年（1942 年）に一人の女性と結婚、42

歳の時です。それから6人の子供を作り、昭和31年、56歳で亡くなっています。お手紙をくださった息子さんが14歳の時だそうです。

その息子さん長嶋太郎さんは先ほども言いましたように、今79歳だそうです。お母さんはもちろん6人の兄弟のうち4人はもう亡くなっているのだそうです。この茶臼原に石井十次先生の施設が岡山から移されずとあることは分かっていたのだと思います。なぜ今、問い合わせたのか問題です。

自分が生きている間に、子や孫に、自分たちのルーツについて、キチンと調べて、伝えておきたいというお気持ちだと思います。その方のお父さんが岡山孤児院を出てすでに101年の年月がたっています。亡くなってからも65年という年月がたっています。ルーツ捜しの気持は、いくら時がたとうと風化するものではないということを教えられます。

私が調べた範囲のことは、昨日手紙で報告させていただきました。そして添えた手紙に次のように書かせていただきました。

「石井十次先生は大正3年に亡くなっています。その後もこの茶臼原に残り、理想郷建設のために他の方々と一緒に奮闘して下さいましたこと、感謝申し上げます。そのおかげで、現在の石井記念友愛社が存在することができています。」

今回のお手紙から二つのことを学びます。子供たちもしっかり聞いてください。

一つは、現在こうして私たちがこの茶臼原で平和に何不自由なく生活できているのは、100年以上前から必死に開拓し、またこの地を守って来てくださった石井十次先生を初め、多くの職員や子供たち、そして地域の方々のおかげだということ。先ほど松井牧師が「種は良い地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」(ルカによる福音書8章4節～8節)と話していただきましたが、この大地を「良い地」にするために石井十次先生、職員・子供たち、そして独立した卒院生の方々が働いてくださったのです。そういう方々への感謝の気持を新たに持つことができました。ここにいる子供たちも感謝の気持を持ってほしいと思います。

もう一つは、子供たちにとって重要なことです。40年後、50年後、場合によっては100年後かもしれない。自分の子供や孫が、ルーツ探しにここへ来るかもしれない。ということです。その時自分の運命を変えるために、ここで自分なりにコツコツと努力し、生活力、自律力、社会性を身につけていったという歴史を残してほしいということです。子や孫が胸の張れるような生活をここでしておいてほしいということです。失敗はしてもよい、しかし、失敗をしたならばその弱さを克服するような努力をしたという痕跡を残してほしい。

79歳のその長嶋太郎さんは、いずれ友愛社に訪れて来られると思います。その時、お父さん方ががんばりのおかげで、石井記念友愛社もこうして平和に運営できていますと感謝の気持を伝えるつもりです。ここにいるみんなも子や孫が誇りにできるような生活をここでしてほしいと思います。以上、理事長としての挨拶にかえさせていただきます。

長嶋次郎様の件は、その後も調査した結果、重要なことが分かりました。あの明治38年秋の東北地方一帯を襲った冷害による被災児とも思われ、救済児825人の中のお一人だったのです。すぐに息子様へ報告させていただきましたが、ここに、その手紙のやり取りを紹介させていただきます。

拝啓 先日、7月初めに長嶋次郎様の件でご報告をさせていただきましたが、届きましたでしょうか。

その後も調査を続けましたが、新たに重要なことが分かりましたので、再度報告させていただきます。

長嶋次郎様は、福島県出身のようです。入院が東北凶作地からの大勢の入院と重なっていますので、念のために、東北凶作地からの入院児を調べましたら、お名前が出てきました。次郎様の所を書いてある住所は、最初に預けられた所とも思われます。黒木さんという方が最初に保護し、石井十次の所に行った方が教育も受けられるということで、他の凶作地域の子供達と一緒に岡山に送られたのかもしれませんが。個人で保護していたということであれば、生まれはこの喜多方町内である可能性大です。もしかしたら、親族の方がおられるかもしれませんね。

岡山で2年ほど学び、明治41年に宮崎へ移っています。当時は主婦（保育士）1名に10数人の子供達を与え、一軒の家で家庭的に生活するという養育システムでした。大切に育てられたと思います。

石井十次が亡くなった後、近隣の農家に見習い生として奉公に行っています。これは、農家として独立するための現地実習と言ってよく、多くの子供がそうして独立していきました。敬具

7月17日

石記念友愛社 児嶋

長嶋太郎様

拝啓 この度はたいへんお世話になりました。賜りましたご対応そして資料により、唯々、父のこと、母そして兄弟縁者の顔と重なり、感涙に浸っています。そのために、礼を失し、返信が遅くなりましたことをお詫び申し上げます。賜りました貴重な資料を基として、今後は父の生き様を辿り、年譜にまとめ、後生に残したいと思っております。小生も忙しくなります。福島へ行き、出自の元を捜しあてること、そして一段落いたしましたら、ご報告方々、御礼にお伺い致したいと存じております。

末筆ではございますが、皆様のご多幸を心より祈念申し上げまして、冷静を装いつつ、取りあえずの返信とさせていただきます。敬具

拝復 お手紙、ありがとうございます。

「感涙に浸って居ります」というお言葉に、私も涙を流しております。「こうしてご連絡下さってよかった」という思いです。ご連絡下さるまでには、おそらく色んな葛藤がございましたと思います。長い年月を重ねる中で、御決断されたことに、私は敬意を表します。

「小生も忙しくなります。」というお言葉に、私は希望を感じます。福島にも行かれるとのこと。天国の御尊父様も、よろこんでおられることでしょう。

当時の岡山孤児院卒院生の方々が、多くを語られなかったのは、世の偏見から家族を守るためでしょう。仕方ないことだったと思います。

しかし、今は時代が違います。石井十次の弟子であったことを、むしろ誇りとすべき時代です。石井十次は、亡くなる時、残る一人ひとりが石井十次になってがんばってほしい旨のことを言い残しています。長嶋次郎さまの心の片隅に、その言葉は生き続けたと思います。

「オレは石井十次先生のもとで学んだ」と大声で言いたかったのに、時代がそれを許しませんでした。

太郎様が福島へ行かれ、できるだけ御尊父様のルーツを探られる、この行為は、当時の偏見に対する仇討ちみたいなもので、がんばっていただきたいと思います。

岡山孤児院の卒院生は二千数百人ですが、今やその子孫は、数万人に達していると思います。おそらくその中に少なからず、長嶋様のように、自分たちのルーツのことで調べるべきか否かと悩み葛藤されている方がおられると思います。今回の長嶋様の行動は、そういう方に、勇気と希望を与えることになります。

私の使命は、石井十次のもとで学んだ人々の御子孫が、外なる偏見内なる偏見を超えて、誇りを持っていただけるように導くことでもあります。孤児院という名称は使っていますが、石井十次にとっては、岡山孤児院の事業は教育であったのです。岡山孤児院で学んだ人々は、一人ひとりが石井十次の弟子であったのです。吉田松陰の下で学んだ、西郷隆盛の下で学んだというのと変わらないと思います。

これから1年ほどは、お体を大切にされ、天国の御尊父様のため、そして孫や曾孫さん方のために、がんばってください。

今も、家族から離れて施設で生活している子供たちはいます。その子供たちのため、私もがんばります。

敬具

7月28日

石記念友愛社 児嶋

長嶋太郎様